



あべ かん  
阿部 幹

1934年4月30日生

青森県八戸市鮫町生まれ。

青森県立八戸高等学校卒業後、小学校教員となる。鮫町を舞台に、伝承される墓獅子等の鮫神楽や祠・浜等の伝説をモチーフとして、当時の資料を検証し小説化している。

鮫をこよなく愛した……「ノブオさん、それは違う。こよなくだばわがね。オラ、鮫を大好きだの。なんとかがしたいと思ってるのえ。わがりあんすべ？」……そんな声が聞こえてきそう。自宅を訪問すると、「鮫アなす……」から始まり、「ノブオさん、街で演劇をやるのもいいんども、鮫さ、もう少し関わってもいいんでねエがい。」耳が痛かった。

鮫を愛し、鮫のために人生を捧げた阿部 幹先生が永眠された。幹先生が、鮫のために行った活動は枚挙にいとまがない。

鮫振興会。事務局の中心となって辣腕を振るった。往時、町民に向けての広報紙『鮫振興会新聞』があった。「これだば、読む人アいながべ」という先生のひと声で、紙面一新。読み易さを基調に新広報誌「さめまち」が誕生。勿論、編集会議は幹先生宅。年6回発行で、12月で166号を数える。振興会事務局メンバーは、OBを含めて【阿部組】と呼ばれている。いかに、幹先生が慕われていたか。

1971年、小中学生対象の鮫神楽伝承会が発足。幹先生は、保存会の事務局長を30年以上務めた。2011年発刊の『村 次郎全詩集』の編集会議は【村 次郎の会】のメンバーがたくさん資料を集めてくる。いろんな意見が飛び交い、そして、あの分厚い2冊の詩集ができあがった。幹先生の口ぐせ。「村さんを、鮫の人ア、まっと大事にしねばわがねんだ」

忘れてならないのは、鮫を舞台に描き続けた小説群だ。『お園』『おむら』『海霧が気になる女』では、鮫村に生きる女の心情に鋭く迫った。『鮫の神楽 小説佐藤連平』『葦毛崎』『彼岸崎』小説集『鮫の神楽』『潜吾の行方』『恵比須浜異聞』『筵旗を立てた男』等々。そして『呪縛の旅』では幹先生自身の人生を描き切った。

最後に、僕の亡父徳三郎が書いたデーリーの「こだま」欄の投稿文や鮫町の歴史や思い出、こぼれ話の随想を、幹先生と奥様が、「<sup>はまびと</sup>浜人の詩」という小冊子にまとめて下さり、それが7冊にもなった。感謝しかない。